

興福寺阿修羅像

元青山学院大学教授 浅井和春

天平文化の阿修羅像

この像は、三つの顔と六本の腕をもつ異形の姿であらわされ、少し眉をひそめて正面を見つめる若く真摯な表情や像高153cmの細身のプロポーシオンとともに、天平文化を代表する作品として、また今日わが国で最も人気のある仏像として知られている。

阿修羅像を伝える興福寺は、奈良時代の都・平城京への遷都（和銅3年・710）とほぼ同時期にその建設が企てられた寺院である。遷都を主導したのは右大臣藤原不比等であり、興福寺はその氏寺として、奈良時代の前期においては元興寺・大安寺・薬師寺と並ぶ四大寺の一つでもあった。本像は、その興福寺の西金堂本尊・釈迦三尊像を取り囲む群像（眷属）にふくまれる八部衆の一体として造られたものである。

阿修羅の呼び名はサンスクリットのアスラ^{asura}の音写とされ、インド神話においてはデーバ^{deva}とともに神を意味していた。しかし、やがてアスラは悪神を、デーバが善神を意味するようになり、仏教に取り入れられた後は八部衆にふくまれ、釈迦如来を守護する眷属の一員としての役割をになうこととなる。『妙法蓮華経』や『金光明最勝王経』では、八部衆は釈迦の靈鷲山での説法を聞いて仏に帰依したと記され、同じく釈迦の説法に参集した十大弟子とともに造られるのはそのためである。

なお、本像は唐時代・7～8世紀に流行した三面六臂像であり、三面は異教の神から仏教に帰依した阿修羅の複雑な性格をあらわし、また六臂は、第一手が合掌（釈迦への帰依）、第二手が太陽と月（宇宙や寿命）、第三手が天秤と曲尺（確かな規範）を持つと推定される。

興福寺西金堂は、天平5年（733）正月11日に亡くなった藤原不比等の妻梶犬養（橘）三千代の冥福を祈り、翌年正月の一周忌法要のために娘の光明皇后によって建てられた。阿修羅像も、この間の制作であることが明らかである。当時の日本の文化は大

陸文化の強い影響下にあったが、それをわが国にもたらしたのは遣唐使である。阿修羅像に代表される興福寺西金堂の造像は、遣唐使が伝えた唐の仏像の技法や様式を反映していたことが推定される。その意味で慶雲元年（704）、養老2年（718）、天平7年（735）にそれぞれ帰国した三度の遣唐使の役割は重要といえるが、阿修羅がしめす技法・様式は、そのうち養老2年以前の遣唐使によって伝来したものと考えられる（ちなみに、天平7年にもたらされたものは東大寺の造営に反映された）。

史料としての阿修羅像

この像を祀った興福寺西金堂の詳細については、『興福寺流記』（別名『山階流記』）と『正倉院文書』に収められる「造物所作物帳」により判明する。特に後者には、西金堂の造営が天平5年正月21日から翌年正月9日までを要したこと、仏像の制作には漆が大量に使用されたことや「仏師將軍万福」や「絵師秦牛養」などが担当したこと等が伝えられ、仏師や絵師の1か月間の報酬（仏師は米六斗）も判明する。仏師將軍万福については、百済から渡来した人びとの中に將軍姓の人物がいることから、彼も百済系渡来人と考えられる以外にその詳細は不明である。しかし、光明皇后発願の造像に携わったことや、当時は一部にしか許されなかった「仏師」（その他は仏工）の職称を許されることなどから、一流の造像技術者であったことは疑いないだろう。また、この釈迦三尊を中心とする群像は、いわゆる靈鷲山における釈迦如来の説法に参集した釈迦集会像と呼ばれるものであり、養老2年に帰国した道慈が唐より将来した『金光明最勝王経』による最新の造像群であった。

この像の技法は、①塑像の原型に数枚の麻布を漆等で貼り重ね、②乾いた後に塑土を取り除き、③木骨を組み込むなどした後に、④像の表面に木屎（木粉に漆などを混入して粘土状としたもの）を盛って整形し、⑤彩色して仕上げる、脱活乾漆造の技法で制作される。その造形は捻塑材としての木屎の特性を存分にしめす柔軟性に満ちたもので

あり、表情にも、母の死を前に光明皇后が懐いたであろう深い哀しみの気持ちを汲んだ、仏師將軍万福の高度な感情の表現が認められる。



